

ソマリア難民に愛の手

アジア医師連絡協 22日、第一陣が出発

医療面で協力したい



津曲医師

アジア十三カ国・地域の医師約四百人でつくるNGO（非政府組織）「アジア医師連絡協議会（AMD）」

（本部・岡山市、菅波茂代表）は国内の他のNGOとともに、抗争と飢餓に苦しむアフリカ北東部の

ソマリアから隣国のケニアやシブチに流出した難民の救援医療プロジェクトチームを派遣する。第一陣として、AMDの津曲兼司医師（岡山県岡山市）が二十二日に岡山を出発。約二週間、現地に滞在し今後一年にわたる活動の体制づくりをする。

計画は、国内では珍しくNGO同士が協力する形で実施する。シブチ駐日大使から派遣依頼を受けたAMD

母親に抱かれる難民の赤ちゃん（ソマリア国境から約20キロのケニア・リボイ難民キャンプで（アフリカ教育基金の会撮影）



DAと、ケニア内務省から要請を受けたNGO「アフリカ教育基金の会」（事務局・北九州市若松区、電話093・741・461

）などが中心になる。昨年十一月下旬に開かれた

「第二回全国NGOの集い」で合同派遣の案が出た。今回は、多国籍医師団構想を進めているAMDが日本のほかインドやバングラデシュの医師、看護婦延べ約三十人を、ケニア東北部やシブチ南部、ソマリア国内に設置されている難民キャンプに派遣。「教育基金の会」の約六十人などがサポートするとともに、ケニア現地で医師を確保する。この地域では、マラリアや結核などが流行。特にシブチでは、国内に約百人しか医師がいないうえ、海外のNGOの援助もないまま主要病院の受診者の七五％を難民が占める状況で、援助が急務だという。

津曲医師は「現地は自然環境が極めて厳しく、難民だけでなく現地の人自体もたいへん苦しい生活を強いられている。そういう人たちにも医療面でぜひ協力したい。私たちがこれまで、アジア各国で築き上げてきた方法、手段が、今回も役に立つと信じている」と話している。